

平成 25 年 2 月 18 日

第 22 回日本医療薬学会年会実施報告書

第 22 回日本医療薬学会年会

年会長 佐藤 博

新潟大学医歯学総合病院 教授・薬剤部長

事業名： 第 22 回日本医療薬学会年会

主催者名： 一般社団法人 日本医療薬学会

年会長： 佐藤 博（新潟大学医歯学総合病院 教授・薬剤部長）

会 頭： 安原 真人（東京医科歯科大学医学部附属病院 教授・薬剤部長）

後 援： 一般社団法人 日本病院薬剤師会、新潟県病院薬剤師会

公益社団法人 日本薬剤師会、社団法人 新潟県薬剤師会

日本薬科機器協会

実施日程： 平成 24 年 10 月 27 日（土）～28 日（日）

実施場所： 朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）

〒950-0078 新潟県新潟市中央区万代島 6 番 1 号

TEL：025-256-8400 FAX：025-246-8411

ホテル日航新潟

〒950-0078 新潟県新潟市中央区万代島 5 番 1 号

TEL：025-240-1888 FAX：025-240-1880

会場数 口演会場：9、ワークショップ会場：1（薬科機器協会 WS 会場：1）

ポスター会場：1、展示会場：3

年会の趣旨

第 22 回日本医療薬学会年會を、平成 24 年 10 月 27 日（土）、28 日（日）の 2 日間、新潟市中央区の朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）を中心に開催した。日本医療薬学会は、平成 2 年に発足した日本病院薬剤師会を母体とした、病院・薬局など医療現場に携わる薬剤師を中心とし、製薬企業、教育機関、研究所等の薬剤師や薬学生にまで会員を広げている学会である。平成 13 年には日本医療薬学会と改称、平成 20 年には一般社団法人を取得した。本年会は年に一度、日頃の臨床業務・研究・教育の成果を発表するとともに、医療薬学に関する最新の知識と情報を交換・発信する場である。

第 22 回年會が開催された平成 24 年は、薬学教育にとって、初の薬学 6 年制を卒業した薬剤師が世に輩出される年に当たる。また、病院薬剤師にとって、前回の診療報酬改定からの悲願であった薬剤師の病棟配置に関して、「病棟薬剤業務実施加算」として、平成 24 年診療報酬改定で評価された。急性期医療の担い手である DPC 対象病院においても、平成 24 年度から、大学病院本院群、高診療密度病院群およびその他の病院群への棲み分けを開始し、外来診療の出来高データの提示も同時に義務付けた。さらに、製薬企業も医療イノベーションと新薬創出の掛け声のもとに、グローバル化を進め、従来の生活習慣病治療薬から、抗体医薬品等にみられる個別化医療への展開も急ピッチである。このように、平成 24 年は、産業では傍流であった「医療」を新たな社会発展の起爆剤として位置付けるケジメの年に当たっているようにも思われる。そこで、本年会は「岐路に立つ医療～千年紀の目覚め～」をメインテーマ、副題は「よみがえれ！ニッポン！薬の改革は我らが手で！」とし、「医療」にあつて、大きな役割を果たす「薬」とその担い手である「薬剤師」に、「今、求められていることは何か」を、あらゆる面から問いかけすることを意図した。

指定演題は、特別講演 3 題、教育講演 1 題、講演（市民公開講座）2 題、各受賞講演、シンポジウム 31 題、日中韓薬剤師国際シンポジウム、パネルディスカッション 1 題、ワークショップ 2 題、ラウンドテーブル 2 題とした。特別講演 1 は「24 年度診療報酬改定と薬剤師の役割」、特別講演 2 は「地域医療計画見直しと薬剤師の役割」、特別講演 3 は「病院薬剤師への熱い期待」である。教育講演は、「未来の子どもたちに抗微生物薬を有効な医療資源として手渡すために— Antimicrobial Stewardship Program（抗微生物薬管理プログラム）における薬剤師の役割—」である。また、市民公開講座は、「薬剤師の将来と PMDA の活用方策」および「消化器内科医の立場から、ぜひ気をつけて欲しいお薬—抗血栓薬（抗凝固・抗血小板薬）と NSAID、そしてピロリ菌除菌—」である。シンポジウム等については、公募制をやめて、年會からの指定とした。これにより、多くのジャンルを網羅できたと考えている。また、視点を変える意味から、薬剤師の他に、医師、看護師、文系出身教授、ジャーナリスト等にも、シンポジウムのオーガナイザーとして、参画いただいた。

本年会は、教育、研究開発、企業、病院、保険調剤薬局など、医療分野に広くかかわる薬剤師の特徴を、余すところなく具現化（見える化）できる最高の場となることを期待し、企画した。

会費等の設定

参加費	会員	非会員	学生	懇親会	一般	学生
事前参加登録	8,000円	12,000円	3,000円	事前参加登録	8,000円	4,000円
当日参加登録	12,000円	15,000円	4,000円	当日参加登録	10,000円	5,000円

講演要旨集： 3,000円

市民公開講座： 無料

共催ワークショップ（予約制）： 無料

事業内容

1. メインテーマ 岐路に立つ医療 ～千年紀の目覚め～
よみがえれ！ニッポン！薬の改革は我らが手で！
2. 年会長講演 1題
3. 日本医療薬学会学術貢献賞受賞講演 2題
4. 日本医療薬学会奨励賞受賞講演 3題
5. 日本医療薬学会 Postdoctoral Award 受賞講演 5題
6. 特別講演 3題
7. 教育講演 1題
8. シンポジウム 31題
9. パネルディスカッション 1題
10. ラウンドテーブル 2題
11. 一般演題 1,340題（演題取り下げ1題）
12. 共催セミナー 18セッション（ランチョン）
13. 共催ワークショップ 3セッション
14. 市民公開講座 1題
15. CJK シンポジウム 1セッション（6題）
16. 市民向けお薬相談コーナー

参加者数

有料参加者数： 5,336名

非会員登壇者数： 93名（参加費を徴収せず）

懇親会： 247名

市民公開講座： 180名

<有料参加者内訳参考資料>

参加者内訳	正会員	非会員	学生	外国人	合計
事前参加	3,016名	845名	134名	30名	4,025名
当日参加	694名	528名	89名		1,311名
有料参加者計	3,710名	1,373名	223名	30名	5,336名

運営組織

年会長	佐藤 博	新潟大学医歯学総合病院		
組織委員長	早狩 誠	弘前大学医学部付属病院		
組織委員	有吉 範高	千葉大学医学部附属病院	長澤 敬一	社団法人 新潟県薬剤師会
	石澤 文章	NTT 東日本東北病院	中島 克佳	東京大学医学部附属病院
	板垣 史郎	弘前大学医学部附属病院	永田 将司	東京医科歯科大学医学部附属病院
	伊藤 晃成	東京大学医学部附属病院	仲村 スイ子	新潟親愛病院
	大森 栄	信州大学医学部附属病院	中村 智徳	群馬大学医学部附属病院
	小笠原 恵子	十和田市立中央病院	平井 みどり	神戸大学医学部附属病院
	折井 孝男	NTT 東日本関東病院	本間 真人	筑波大学附属病院
	金沢 久男	大館市立総合病院	増田 寛樹	高崎健康福祉大学
	上山 誉晃	(株)薬事新報社	松原 和夫	京都大学医学部附属病院
	蒲澤 一行	盛岡赤十字病院	眞野 成康	東北大学病院
	北田 光一	(一社) 日本病院薬剤師会	三浦 昌朋	秋田大学医学部附属病院
	工藤 賢三	岩手医科大学附属病院	村田 正弘	セルフメディケーション推進協議会
	幸田 幸直	筑波大学附属病院	望月 眞弓	慶應義塾大学
	小口 俊夫	山梨大学医学部附属病院	百瀬 泰行	信州大学医学部附属病院
	齋藤 直也	県立がんセンター新潟病院	安原 真人	東京医科歯科大学医学部附属病院
	坂爪 重明	新潟薬科大学	八巻 俊雄	福島赤十字病院
	佐藤 誠二	手稻溪仁会病院	山本 康次郎	群馬大学医学部附属病院
	塩川 秀樹	竹田総合病院	山本 信夫	(一社) 東京都薬剤師会
	白石 正	山形大学医学部附属病院	和田 孝治	済生会山形済生病院
	鈴木 洋史	東京大学医学部附属病院		
	寺松 剛	山梨大学医学部附属病院		
	徳間 一夫	厚生連刈羽郡総合病院		
	豊口 禎子	山形大学医学部附属病院		

事業成果

平成 24 年 10 月 27 日（土）、28 日（日）の 2 日間、新潟市中央区の朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）を中心に開催した第 22 回日本医療薬学会年会では、5,336 名の参加者を得た。なお、開設後 10 年になる朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）において、過去最大の参加者数の学会であったとのことである。また、年会前日 10 月 26 日（金）には、例年通り、日本病院薬剤師会主催の平成 24 年度日本病院薬局協議会を朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター）国際会議室にて開催した。

本年会は、メインテーマを「岐路に立つ医療～千年紀の目覚め～」、副題は「よみがえれ！ニッポン！薬の改革は我らが手で！」とした。特別講演 1 は、今年 4 月の診療報酬改定により、週 20 時間という「半常駐状態」とはいえ、薬剤師の全病棟配置を基本とする「病棟薬剤業務実施加算」実現の先鞭をつけた、現 DPC 評価分科会会長である小山信彌先生（東邦大学医学部心臓血管外科教授）により「24 年度診療報酬改定と薬剤師の役割」と題しご講演頂いた。特別講演 2 は、平成 25 年度（2013 年度）から実施の地域医療計画（5 年計画）を策定する「医療計画の見直し等に関する検討会」（2010 年 12 月～2011 年 12 月）の座長を務め、また、本年 8 月 1 日に発足し、病院機能に合わせた効率的な入院医療の推進、入院医療や外来医療の機能分化の推進や適正化に向けた検討など 5 項目を検討する中央社会保険医療協議会の調査専門組織「入院医療等の調査・評価分科会」の分科会長にも就任した武藤正樹先生（国際医療福祉大学大学院教授）による「地域医療計画見直しと薬剤師の役割」のご講演を頂戴した。特別講演 3 は、「病棟薬剤業務実施加算」をはじめ多くの病院薬剤師に関する懸案の課題を解決に導いた前（一社）日本病院薬剤師会会長である堀内龍也先生により「病院薬剤師への熱い期待」と題したメッセージを頂いた。教育講演は、長らく米国で小児の感染症の治療に関わってきた齋藤昭彦先生（新潟大学大学院医歯学総合研究科小児科学分野教授）による「未来の子どもたちに抗微生物薬を有効な医療資源として手渡すために—Antimicrobial Stewardship Program（抗微生物薬管理プログラム）における薬剤師の役割—」です。特別講演の 3 演題、教育講演ともに、本年会のテーマに相応しく、薬剤師が医療の中で、今、何を求められているかについての示唆に富んだ、貴重な公演であった。市民公開講座は、磯部総一郎氏（医薬品医療機器総合機構審査等改革本部事務局長）による「薬剤師の将来と PMDA の活用方策」および新潟大学医歯学総合病院消化器内科助教である佐藤祐一先生による「消化器内科医の立場から、ぜひ気をつけて欲しいお薬—抗血栓薬（抗凝固・抗血小板薬）と NSAID、そしてピロリ菌除菌—」と題して行った。また、新潟県病院薬剤師会と新潟県薬剤師会合同のお薬相談コーナーも設置した。参加者は必ずしも多いたとは言えなかったが、一般市民に対して、日本医療薬学会および薬剤師の活動をアピールできたと考える。

今回、シンポジウム等については、公募制をやめ、年会からの指定とさせて頂いた。薬物療法専門薬剤師を含む各種専門薬剤師制度に加えて、薬学教育分野、医療情報の基盤、アカデミア発の新薬開発、臨床研究倫理、チーム医療、フィジカルアセスメント、地域医療における保険調剤薬局の役割、地域連携パス、ジェネリック医薬品、院内製剤、副作用対策、薬剤師外来、災害医療、研究マインド、医療薬学の将来展望、行政および医療ジャーナリストからの意見など、多くのジャンルを網羅するためでもあった。また、視点を変える意味から、薬剤師の他に、医師、看

護師、文系出身教授、ジャーナリスト等にも、シンポジウムのオーガナイザーとして、参画頂いた。最終的に、シンポジウムは31、パネルディスカッションが1、ラウンドテーブルが2とCJKシンポジウムが1となった。

一般演題は1,400近くの申し込みがあり、1,340題を採択した（採択後の演題取り下げ1題）。なお、一般演題は、年会参加者との十分な議論をしていただくため、全てポスター発表とした。ただし、すべてのポスターを貼付し続ける会場を確保できず、1日目と2日目でポスターを張り替えることとした。

多様化、拡大を続ける薬剤師業務を偏らずに取り上げるには、シンポジウム等については指定制とすることが良い方策であると考えた。しかし、治験・臨床研究のように、重要でありながら、医療薬学会の参加者には興味を持つ者が少ないジャンルも存在する。一方、認定薬剤師等の単位が取得できるシンポジウムは、参加者が多くなる。参加者数に応じた大きさの会場を割り当てるよう、サテライト会場を設けるなどの配慮を行ったが、シンポジウムS1C-1『がん薬物療法における「薬剤師外来」の取組みの現状とその先』など、参加希望者を収容できない会場も少数ながら存在した。これは大きな反省材料である。また、当日参加者が予想よりも遙かに多く、参加費の領収書が不足する事態となり、関係者にはご迷惑をお掛けした。

ワークショップについては、その性質上、参加人数が各々50名程度に制限された。ワークショップの参加者からは、非常に好評であったが、1ワークショップに、全参加者数に対し0.1%程度の人数しか参加できないため、希望のワークショップに参加できないとの声も多くあった。

このようにいくつかの反省点があるものの、大きなトラブル等無く、「教育、研究開発、企業、病院、保険調剤薬局など、医療分野に広くかかわる薬剤師の特徴を、余すところなく具現化（見える化）できる最高の場」として有意義な年会になった。関係者のご協力に感謝する次第である。